

バルトリの歌った〈アルチーナ〉は
もちろん名演となった
©Salzburger Festspiele / Matthias Horn

Report

ザルツブルク聖霊降臨祭音楽祭2019

(期間:6月7~10日)

今年のテーマは「カストラート」

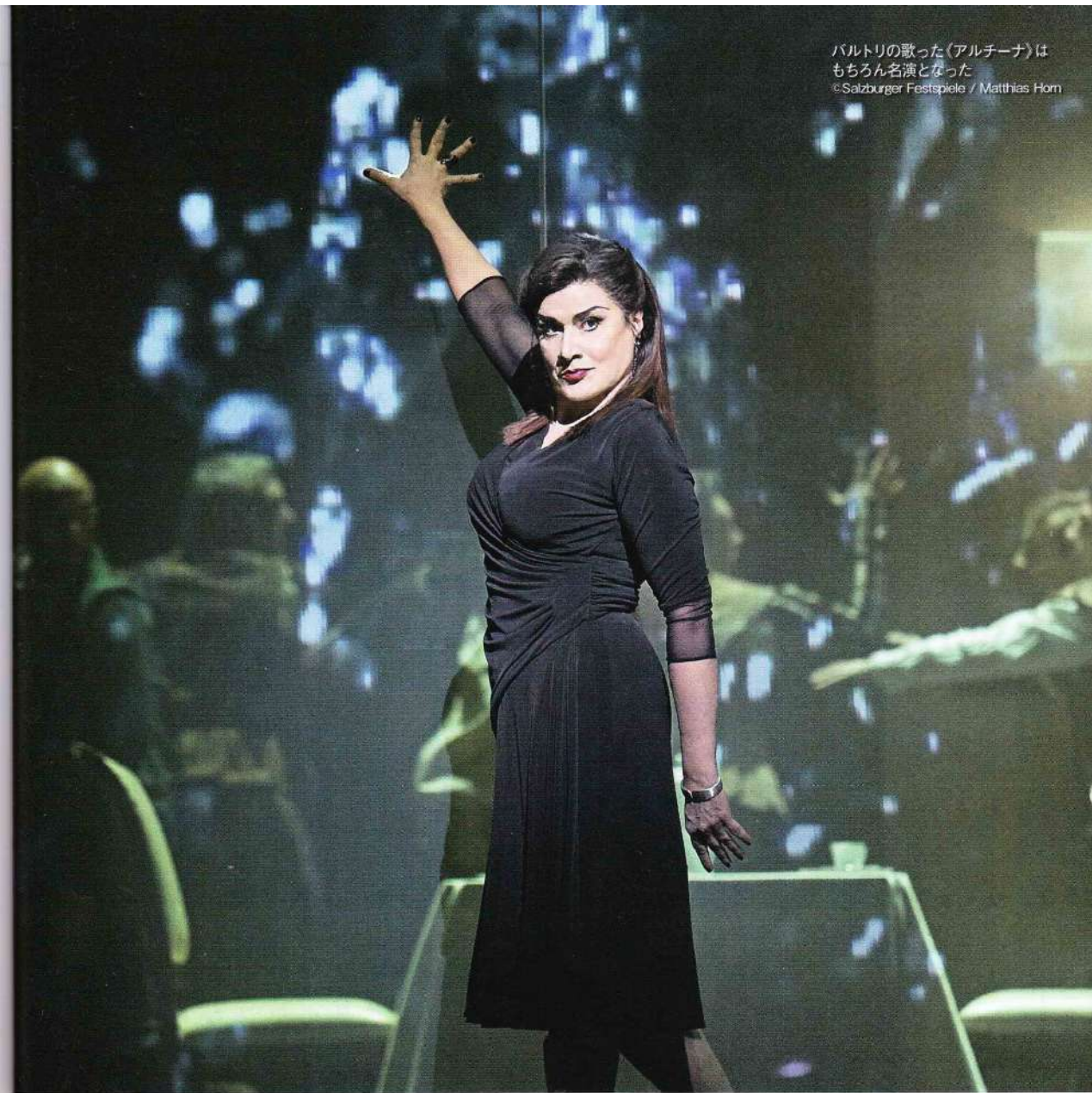
取材・文 中東生
Text: Shinobu Naka

若い世代への支援が感じられる
キャストイング

2012年よりザルツブルク聖霊降臨祭音楽祭の芸術監督を務めるチェーリア・バルトリは、毎年テーマを絞ったプログラムミングをするため、比較することは難しいが、今年は特定の後進を支援する以上に、若い世代全体への温かい眼差しが感じられた。それは、今年のテーマである「カストラート」(去勢して変声しないようにした男性歌手)の時代に、芸術の名のもとに男性としての人生を犠牲にした、無数の名もない歌い手たちへの情が反映されているのかもしれない(カストラート歌手ファルネッリの生涯を描いた映画「カストラート」(1994年)も期間中2回上演された)。

例えば、ボルボラのおペラ《ボリフェーモ》(6月8日)でセミ・ステージングとウリッセ役を兼任したマックス・エマニエル・ツェンチッチャ、ガラテア役に起用されたユリア・レージネヴァ、その他カルダラのオラトリオ《アベルの死》(6月9日)は全キャストが新進注目

5~6月の精霊降臨祭の時期に行われる、ザルツブルク聖霊降臨祭音楽祭だが、1998年の再スタート以降、いまやバロック音楽の音楽祭として、この時期に欠かせないものとなった。メゾソプラノ歌手のチェーリア・バルトリが2012年に、ヘルベルト・フォン・カラヤン、リッカルド・ムーティの後を継いで、芸術監督に就任したことも大きな話題となった。





壮観だったガラ・コンサート。新進歌手の活躍が印象的だった ©Salzburger Festspiele / Matthias Horn

歌手だ。
新進の力を結集した
ガラ・コンサート

そんな新進歌手の力が結集されたのが、6月8日のガラ・コンサートだ。約4時間にわたるコンサートは「ファリネ

ツリ&フレンズ」と名付けられていたが、ほぼ全員がすばらしい自分の世界を披露した。

ザルトブルク・バッハ合唱団に10人のソリストが混ざり、今年のオペラ演目であるヘンデル《アルチーナ》の合唱で開演した後、バルトリがお得意の《ガウラ

のアマデイージ》よりメリツサのアリアでテンションを上げ、トップ・バッターのスリア・リアルにバトンを渡した。同じくヘンデル《時と悟りの勝利》の《美のアリア》で、集中力を掴むまでは時間がなかったものの、最後には静寂を手中に収めた。次はカウンターテナーのクリストフ・デユモーが、当時ヘンデルのライヴアルだったボルボラのオペラ《禿げのカルロ》のアリアを、そのタイトル通り、独裁者のようにマツチョに、自由自在に操るコロラトゥーラを誇示して歌い上げたので、大喝采を浴びた。その成功に恐れをなしたのか、続くサンドリーネ・ピオは他の歌手たちのレヴェルに到底届かないものだった。それに比べて若手のレア・ドサンドルは、オルランディーニ《守られた無実》のアリアを落ち着いて歌って好感が持てた。

前半の頂点は、アン・ハレンベルグのコレネリアとフィリップ・ジャルスキーのセストが繊細に紡ぐ《エジプトのジュリオ・チエーザレ》の二重唱だった。これは聴覚に至福感を与え、続くジュリア・フックスが歌ったラモー《プラテ》のフォリーのアリアは、指揮者も巻き込んだ演技で視覚的にも楽しませた。前出のハレンベルグがレオ《ウティカのカトー》の超難曲を歌った後、バルトリシア・プティボンがラモー《カストールとポリュックス》からテライールのアリアを、ノン・ヴィブラートのトランス状態を歌った。その後リアルとデユモーが《リナルド》から「アルミレーナとリナルドの二重唱」を聴かせ、最後にヴィヴィカ・ジュノーが、録音もしているプロスキのオペラ《イダスベ》のアリアをカストラートのように歌い、休憩となった時には約2時間が経過していた。

後半も同じ歌手たちが技を競ったが、特筆すべきはプティボンの歌った《エジプトのジュリオ・チエーザレ》の、クレオパトラが2幕に歌うアリアで、声だけで死んでいく運命を表すような壮絶な集中心力だった。ジャルスキーがトリとして歌った《ポリフェモ》のアチのアリアでは、哀愁を帯びた美声が際立ち、最高レヴェルのバロック・ガラを充実感で締めくくった。《アリオダンテ》の合唱で大団円を迎えた後は、バルトリがデユモーの携帯で、舞台上でセルフイを助けるなど、和気藹々の終演となった。ローランド・ピリヤソンの独・英・仏・西・伊語が混ざり合う司会も観客を楽しませた。

バルトリが題名役を歌った
《アルチーナ》

《アルチーナ》に割く字数がすっかり少なくなってしまうが、字数と満足度は

比例しているわけではない。

ダミアノ・ミキエレットの演出は憤慨させられることも多々あるが、今回は老いたアルチーナを黙役で登場させるなど題名役の心理に迫り、後世に語り継がれるコンサートとなるだろう。いちばん驚いたのは、ガラ・コンサート出場時と同一人物とは思えないほど、ピオのモルガーナが光っていたことだ。他には、クリステイーナ・ハンマーストロームの柔らかない声、温かいブラマンテ、メリツソ役のアラステール・マイルスのよく響く声、コロラトゥーラが自由自在に飛び交うこのメンバーの中で、唯一のテノールとして頑張ったクリストフ・シュトレールも好演していた。さらにウイーン少年合唱団のシーン・パークが、オペルト役をしっかりとこなしたのは脱帽した。彼もツェンチッチのような一流歌手になるだろう。

ジャンルカ・カプアーノが率いる古楽器オーケストラ「レ・ミュージシャン・デユ・プリンス・モナコ」(モナコ公の音楽家たち)は、バルトリの極限まで弱声を駆使するパフォーマンスを支えていた。有名なアリア《ああ、私の心である人よ》や《私は元のまま》などの深い表現が、50歳を超えた彼女の最大の武器であるう。ジャルスキーの《緑の牧場よ》等のアリアも精巧で温かい。

題名役のバルトリの髪の毛は、クリストフ・ロイ演出のドニゼッティ《ロペルト・デヴリユー》で、エディタ・グルベローヴァがカツラを取った時のような衝撃を与えながら抜けていく幕切れだが、観客は満たされた心で祝祭大劇場を後にした(6月9日)。